

2024年8月4日（日）主日朝礼拝説教

『そこを出て、主の前に立て』井上隆晶牧師
列王記上 19 章 8～18 節、ヨハネ福音書 15 章 4～7 節

①【信仰は一日しか、一瞬しかもたない】

北王国イスラエルの王アハブはシドン人のイゼベルを王妃として迎え入れますが、このイゼベルが王を唆し進んでバアル礼拝をさせました。エリヤがバアルの預言者 450 人を殺したという知らせを聞いた王妃イゼベルはエリヤに使者を送り「明日のこの時刻までに、あなたを命を奪う」と予告します。それを聞いたエリヤは恐れ、直ちに逃げました。ベエル・シェバから荒野に逃げ、木の下に座り込み神に祈ります。「主よ、もう十分です。わたしの命を取ってください。わたしは先祖にまさる者ではありません。」(列王記上 19:4)「疲れました。もうこれ以上できません。私はただの人です。なぜ、私にさせるのですか。命を取ってください。死んだ方がましです。」という祈りです。エリヤの絶望が伝わってきます。彼は疲れ果てて横になり眠ってしまいます。18 章の奇跡を行ったエリヤと、19 章の逃げるエリヤはまるで別人のようです。この時、エリヤの目には神が小さく見え、イゼベルが大きく見えていました。人は誰でも、どんな聖人や大預言者と言われるような人であっても神を離れれば、直ちに力を失うということを教えているのです。人は一日で変わる、いや瞬間で変わるのです。信仰とはプラグ（コード側）をアウトレット・ソケット（壁側）に入れるのと同じです。プラグがソケットにつながっていたら電気器具は動きます。でもはずれていたら動きません。礼拝している時だけ信者、祈っている時だけ信者です。そんなもんです。イエス様が言われた「わたしを離れては、あなたがたは何もできない」（ヨハネ 15:5）というのは正しいのです。人は本来、弱い者で力と勇気を得るためにはただひたすら神に頼るしかないのです。神はエリヤに人間本来の弱さを知らせ、ひたすら主に祈らせるために、この試練を与えたのです。しかし、失望し眠りに落ちたエリヤに主は何度も御使いを遣わし、食べ物と水を与えて力を回復させます。「その食べ物に力づけられた」（同 19:8）と書かれています。クリスチャンにとって天国への長い旅路の食べ物は聖餐です。キリストの体と血を食べて私は力づけられます。そしてエリヤは四十日四十夜荒野を歩き続けて神の山ホレブ（シナイ山）に来ました。それは神様が導いたのであり、神の御計画でした。

②【あなたはどこにいるのか～ここで何をしているのかという問い】

彼はシナイ山の洞穴に入り夜を過ごしました。すると神の声が聞こえてきました。「エリヤよ、ここで何をしているのか。」(列王記上 19:9) これは二度言われています。皆さん、この言葉に似たような言葉をどこかで聞いたことがありませんか。アダムが最初の違反を犯した時、神がアダムを呼んだ言葉「あなたはどこにいるのか」（創世記 3:9）に良く似ています。これは人が神と正しい関係になっ

ておらず、神からずれた場所に立っていることを知れという言葉です。一方「ここで何をしているのか。」という言葉は使命に関係する言葉です。あなたはそれをするために創造され、信仰を与えられ、生かされたのか？という問いかけです。エリヤだけでなく、誰でもこの二つの問いかけを神からされているのです。

●榎本保郎牧師は肝硬変で一年余り療養している時に「エリヤよ、ここで何をしているのか」という言葉に強く迫りを受け、ベットから起き上がったそうです。私は最近、キリストの十字架と復活による人間の救いをストレートにもっと語ってゆこうと思うようになりました。長年、保育園でも高齢者施設でも聖書のお話をしてきましたが、信じる者が起こされません。このまま本当に大切なことを話さないで終わってしまうのではないかと、そんな気休めを語るために私は牧師になったのだろうか、神は私をこの地位に置かれたのであろうかと考えるようになったのです。

エリヤは「私は主に情熱をもって仕えてきましたが、イスラエルの民は従わず、あなたの預言者を殺し、私一人だけが残りました。そして今、私の命をも奪おうとしているのです。」と答えます。何か言い訳のように聞こえます。すると、主は「そこを出て、山の中で主の前に立ちなさい。」(同 19 : 11) と言われました。「主の前に立つ」ということは、礼拝の姿勢、み言葉を聞く姿勢です。昔の人は律法を朗読される時、立って聞きました。「彼が書を開くと民は皆、立ち上がった。」(ネヘミヤ 8 : 6) 古代教会でも福音が読まれる時、起立しました。神の前に正しく立ち、神の言葉を聞きなさいということです。この礼拝が崩れると信仰がなくなり、恐れがその人を支配します。恐れは不信仰から来ます。だから恐れを克服しなければ、逃げていないで聖書朗読と祈りから始めなければなりません。

③【神の声を聞く訓練を受けるエリヤ】

その時、主が通り過ぎました。岩を砕くほどの非常に激しい風が起きましたが、風の中に主はいませんでした。次に地震が起きましたが、地震の中にも主はいませんでした。次に火が起きましたが、火の中にも主はおられません。火の後に、静かにささやく声が聞こえてきました。そこでエリヤは主を見ないように外套で顔を覆い、洞穴から出て入り口に立ちました。人は、大きな奇跡やしるしの中に神がいると思っています。しかし神は静かにささやく声の中におられます。エリヤは奇跡を期待していたのです。しかし神は言葉を信じなさいと言われます。ここで神はエリヤに神の声を聞く訓練をされたのです。自分のことをしゃべっている人は、相手の言葉を聞いていません。自分の思いにとらわれている人は、人の意見を聞きません。心を真っ白にして聞くのです。神は静かにささやくのですから、聖書や詩編を朗読する時には、集中して聞くのです。他人が朗読している時、バタバタしてはいけません。ただ耳を傾けるのです。聖書は研究のための書物ではありません。典礼書であり、宗教書であり、聞くものです。イスラム教のコーランも「朗読するもの」という意味です。今の神学校は大きな間違いを犯しています。聞かないで研究しているからです。知識は得ますが、信仰は出ないでしょう。礼拝堂で何時間も朗読する行が必要です。

④【神と出会った人は恵みが見えるようになる】

主はエリヤにこう言われました。「行け、あなたの来た道を引き返し、ダマスコの荒れ野に向かえ。」(列王記上 19 : 15) そしてハザエルをアラムの王とし、イエフをイスラエルの王とし、エリシャを預言者とし、あなたの後継者にせよと命じられます。そして更にこう言われます。「私はイスラエルに七千人を残す。これは皆、バアルにひざまずかず、これに口づけしなかった者である。」(同 19 : 18) エリヤは自分一人だけが残ったと思っていましたが、神は「七千人を残した」と言われます。「一人しか」が「七千人も」になったのです。「~しか」と「も」で思い出す話があります。

●酒枝義旗(よしたか)という早稲田大学の先生は、「先生の集会には何人くらいお集まりですか」と聞かれて「はい、七、八人も来てくれています。」とうれしそうに答えたといひます。藤尾正人牧師はこれを聞いてこう書いています。「よく日本のクリスチャンは数が少なく、という声を聞くが、これは「しか」の精神なのだ。「も」の信仰に立てば、そこから、力が溢れ出るはずだ。五つのパンで五千人が満腹する前、弟子たちは「パンは五つしかない」と見た。しかしイエスは「五つもある」とみられた。この違いだ。小さい事を卑下するな。大きい事を誇るな。小さかろうが、大きかろうが、大事なことは、その中に喜びがこもっていることだ。はちきれぬ喜びがあれば、小さくても、大きくても自由で美しい。「も」の信仰でゆこう。」

振り返ると、今日まで私は大勢のクリスチャンと出会い、助けてもらいました。それは何百人にもなります。もしクリスチャンでなかったら、それらの人には出会わなかったでしょう。すべてはキリストが会わせて下さったのです。外国人の方にも大勢出会い、豊かにされました。この世で信仰を持たずに営業だけやっていたら、先輩とお店の店員くらいしか出会わなかったと思います。キリストと出会ってから、私は何と豊かにされたことでしょうか。あの方の人脈ははかり知りません。それはこの世だけでなく、来世にまで続くでしょう。来世では、私はもっと多くの聖人たちに出会い、もっと豊かにされるでしょう。聖餐を通して、今日も赦しと命をくださいます。これからもキリストがますます大きく見えてくるように祈りたいと思います。

祈りましょう。主よ、私もエリヤやエリシャのように目が開いて、共におられる万軍の主がはっきりと見えるようにしてください。私たちはキリストから離れば何もできませんが、主が共におられるなら何でもできるでしょう。どうか大胆にみ言葉を語り、キリストの聖なる名によって病気が癒され、しるしと不思議な業によって、主が本当におられることを世の人に悟らせることができるようにしてください。アーメン